

ひょうごの遺跡

平成17年
7月16日発行

56号

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町 2-1-5 TEL 078 531)7011 FAX 078 531)7014

ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

兵庫の焼物

篠山城旧三の丸跡出土陶磁器



兵庫県は古くから焼物の生産が盛んな所で、奈良時代から平安時代には播磨地域で作られた須恵器が税として都に送られていました。

平安時代末から鎌倉時代には中世六古窯のひとつとして有名な丹波焼の操業が始まり、現在の神戸市西区から明石市西部一帯を中心に生産された東播系須恵器の捏鉢が、鎌倉時代から室町時代にかけて西日本を中心に広く流通していました。

そして、室町時代後半から江戸時代前半には丹波焼捏鉢が東日本を中心に広い範囲で流通します。さらに、江戸時代の後半には、三田市の三田焼、姫路市の東山焼、南あわじ市の珉平焼、豊岡市の出石焼など、中小の窯が相次いで生産を始めます。とくに、当時のブランド品であった京焼の技術を導入した三田焼、珉平焼の製品は、京・大坂・江戸の三都を中心に全国的に流通しました。

このように、兵庫県で生産された焼物は中世・近世を通じて広い範囲で使われ、我が国の焼物の中で常に重要な地位を占めていたと言っても過言ではないでしょう。今回は、兵庫県下で生産された焼物のうち、とくに江戸時代後半のものにスポットをあててみたいと思います。

安土桃山時代から江戸時代前半の焼物

最初に、中世から近世にかけての焼物の大きな流れについて簡単に述べておきましょう。

中世から近世への転換期にあたる安土桃山時代から江戸時代前半は政治史の上で大きな変化が起きた時代ですが、焼物史の上でも、大きな転換期を迎えました。



丹波焼（篠山城旧三の丸跡出土）

室町時代後半までの焼物は中世六古窯と呼ばれる備前・丹波・信楽・越前・常滑・瀬戸の製品が中心で、瀬戸を除いて、すべて釉の掛かっていない、無釉の焼き締陶器の壺・甕・播鉢を主に生産していました。

しかし、安土桃山時代にはいり茶道が盛んになると、武野紹鷗、千利休、古田織部、小堀遠州などの大茶人が現れ、それぞれの茶人が好んだ黄瀬戸・志野・織部などの和物の茶陶が、瀬戸・美濃の地を中心に生産されようになります。また、それまで、焼物づくりの伝統のなかった九州の肥前有田の地でも、朝鮮の焼物の影響を受けた唐津焼の生産がはじまり

ます。これらの製品は後世に桃山茶陶の名で呼ばれ、日本の焼物史上もっとも活気に満ちた、創造的で変化に富んだものとされています。

さらに、肥前では江戸時代の前半になると、唐津焼の技術の上に朝鮮から技術が加わり、日本で初めて、染付を中心に白磁、青磁などの磁器生産がはじまります。これはその出荷港の名前から伊万里焼の名で呼ばれるようになります。

また、当時の文化の中心であった京都では長次郎、野々村仁精、尾形乾山などの名工が現れ、色絵陶器を中心とした京焼の生産が開始されます。

こうして、江戸時代の焼物の生産は中世以来の瀬戸・美濃を始めとする六古窯に加えて、陶器の唐津焼、磁器の伊万里焼を生産した肥前系陶磁器、高級ブランド品を生産した京焼を中心に展開して行きます。

このような焼物生産の形態に大きな変化が起きるのは、18世紀後半から19世紀前半の江戸時代後期です。

江戸時代後半の焼物

江戸時代の後半になると、それまでの肥前、京焼、瀬戸・美濃などの大生産地に加えて、中小窯が全国的に勃興してきます。こうした全国的な中小窯の勃興にはさまざまな要因が考えられますが、以下のようにまとめることができます。

1. 磁器の生産がそれまでの肥前系磁器の独占状態から瀬戸・美濃、京焼を中心とする全国の生産地に



呉州赤絵皿（姫路城跡出土、写真提供：姫路市教育委員会）

広まったこと。

2. 茶碗、特に飯茶碗に磁器碗が本格的に使用されるようになったこと。
3. 各藩が殖産興業策として焼物生産を奨励したこと。
4. 江戸時代後期の文芸復興の潮流にのって、桃山時代から江戸時代前期の陶磁器に対する需要が急増したこと。

このような状況に呼応して、兵庫県下でも数多くの窯場が生産を始めます。

江戸時代後半の 県下の焼物

江戸時代の後半に兵庫県下で生産されていた焼物には三田焼、珉平焼のほかに、丹波の王地山焼^{おうじやま}、摂津の朝霧焼・舞子焼、播磨の明石焼^{あかしやま}、東山焼、野田焼、雲火焼^{うんか}、但馬の出石焼^{たかや}、高屋焼などがあります。

これらの窯はその製品の技術系譜から、丹波焼のように中世以来の釉の掛かっていない赤褐色の地肌をした焼締め陶器を生産した窯、出石焼、高屋焼のように肥前の磁器生産の技術を導入し、肥前系の磁器を生産した窯、三田焼、王地山焼、珉平焼、東山焼のように肥前の技術を導入して磁器生産を開始し、さらに京焼からの技術導入が加わって、京焼系の高級な陶磁器を生産する窯、明石焼諸窯、野田焼のように京焼系の陶器の中でも主に土鍋、土瓶、行平鍋などの日常雑器を生産した窯の4つに大きく分けることができます。

これらの中で丹波焼は江戸時代前半から半ばにかけては播鉢生産が盛んで、その製品は東日本を中心に流通していました。しかし、江戸時代後半になると堺・明石産のものに押されて、丹波焼の播鉢は少なくなります。そして丹波焼では播鉢にかわって、甕や壺、徳利の生産がさかんになり、特に徳利は貧乏徳利、傘徳利、巾着徳利、蠟燭徳利など変化に富んだ製品が生産され、全国的に流通しています。

三田焼は江戸時代後半の寛政年間に京焼の陶工欽古堂亀祐^{かんた しょうべえ}の指導のもと、三田藩の豪商神田惣兵衛が資金援助をして成立したとされています。また、その製品には中国の龍泉窯系青磁を模倣した青磁の皿・鉢、肥前系の染付磁器、明末～清初の中国製の染付磁器、赤絵磁器を模倣した製品、京焼を模倣した染付の急須などがあります。



三田焼（篠山城旧三の丸跡出土）



王地山焼（篠山城旧三の丸跡出土）



珉平焼（珉平焼窯跡出土）

早わかり 江戸時代のやきものの

線は技術・デザインなどの流れを示しています

肥前(磁器中心)

唐津焼(陶器)



伊万里(磁器)



(いずれも伊丹郷町出土)

高級ブランド

亀祐 欽古堂 周平 尾形

京焼(陶器・磁器)



(楽写茶碗、伊丹郷町出土)

二大ブランド

瀬戸・美濃(陶器・磁器)



(伊丹郷町、明石城武家屋敷跡出土)

また、珉平焼は三田焼よりはやや遅れて、天保年間に賀集珉平^{かしゅうみんぺい}が京焼の陶工尾形周平の指導のもとに開窯しました。製品は中国の華南三彩を模倣した、原色の型物の皿・鉢がその中心でした。

一方、肥前系の陶磁器を生産した出石焼、高屋焼、あるいは京焼系の日常製品を生産した明石焼諸窯の製品は、その流通範囲は狭く、地元を中心に消費されています。

これらの中であって、三田焼、珉平焼の製品は肥前、瀬戸・美濃の製品と比べて、量のはるかに少ないものの、江戸、大坂、京の三都を中心に広範囲に流通しています。では、なぜ三田焼、珉平焼の製品だけが広範囲に流通したのでしょうか。

ひとつは、その生産の開始にあたってそれを指導した神田惣兵衛、賀集珉平がそれぞれ、御用商人、庄

兵庫県のやきもの

出石焼、等

三田焼



(三田市教育委員会提供)

王地山焼



(篠山城旧三の丸跡出土)

珉平焼



(珉平焼窯跡出土)

東山焼



(姫路城跡出土：姫路市教育委員会提供)

丹波焼



(伊丹郷町出土)

明石焼諸窯



(明石城武家屋敷跡出土)

屋として十分な資金と事業家としての資質を備えていたことがあげられます。

さらに、当時、文人趣味の流行によって需要のたかまった中国製陶磁器の模倣を可能にする高い技術を、京焼の陶工を招いて導入したことがあげられます。

このように、江戸時代後半の兵庫の焼物は三田焼、珉平焼を中心に藩窯の王地山焼、東山焼、出石焼、民窯の明石焼、古池焼、さらには中世以来の伝統的を持つ丹波焼など、百花繚乱の趣がありました。

しかし、江戸時代後半に全盛期を迎えた県下の焼物は、明治時代に入ると社会体制の変化とともに再び大きな転換期を迎えることになりました。

コラム 焼物の形とデザイン

窯跡や窯元の調査によって、実際の製品だけではなく、焼物製作に欠かせない道具・文書が見つっています。ここでは三田焼を例に製品を作り出すもとになった道具・文書の一部を紹介します。

土型

三田焼、特に青磁は型でつくられた鉢・皿・香炉等が有名です。それを裏付けるように三田焼の窯元には多様な型が残されていましたし、窯跡からも数多くの型が出土しています。見つかった型は大きく分けて2種類あります。ひとつは「型を作るための型（元型）」、もう一つが「製品を作るための型（成形用土型）」です。ここでは鉢の型を2種類3個載せています。1は成形用土型で、2 aが元型、2 bが2 aから作られた成形用土型になります。



1．三輪明神窯跡出土



2 a．虫尾新田窯跡出土



2 b．虫尾新田窯跡出土

下絵帳

三田焼は中国磁器写しの作品でも知られていますが、製品に描かれた文様の「下絵」（デザイン）をまとめた冊子が見つっています。ここに紹介しているのは「呉州赤絵下絵帖」と呼ばれるもので、中国福建省で焼かれた呉州赤絵磁器に倣ったデザインや器の形を黒、赤の2色で描いています。描かれたデザインの分析によると、この下絵帳には京都で色絵磁器を初めて焼いた奥田頼川（おくだ えいせん 欽古堂亀佑の師匠にあたります）の作品と同じようなものがあり、鳳凰、龍、草花といった文様がパターン化されていることから、京焼の技法に基づいて描かれたもののようです。

このほかにも、陶工がデザイン（絵）の練習に用いたと考えられる「絵手本控」や釉薬、絵薬の配合を記した文書も伝わっています。



「呉州赤絵下絵帖」



「絵手本控」

参考文献：三田市教育委員会『三田焼の研究』（2005）
写真提供：三田市教育委員会

イベント情報

平成17年度 県立考古博物館(仮称)先行ソフト事業

考古楽者養成セミナー(募集は終了)

期 日：5月～平成18年2月

夏季先行展「自然とともに生きる - 人と環境の考古学 - 」

期 日：7月16日(土)～9月4日(日)

会 場：播磨町郷土資料館

環境考古学講座 講師：松井 章氏(奈良文化財研究所)

日 時：7月30日(土) 会 場：播磨町中央公民館 視聴覚教室

環境考古学講座 講師：金原正明氏(奈良教育大学)

日 時：8月13日(土) 会 場：播磨町中央公民館 視聴覚教室

環境考古学講座 講師：光谷拓実氏(奈良文化財研究所)

日 時：9月3日(土) 会 場：播磨町中央公民館 視聴覚教室

体験学習交流会(大中メッセ)(教職員・文化財担当職員を対象とした研修です)

体験学習フォーラム* テーマ「博物館活動と学校教育」

日 時：8月4日(木) 会 場：播磨町中央公民館 視聴覚教室

体験学習フェスティバル* 古代体験学習の技術習得・情報交換

日 時：8月5日(金) 会 場：播磨町郷土資料館

秋季先行展「古代官道をゆく - 交通考古学最前線 - 」(仮題)

期 日：11月12日(土)～1月9日(月・祝)

会 場：播磨町郷土資料館

シンポジウム「古代官道と駅家の考古学」(仮題)

期 日：12月23日(金・祝) 会 場：加古川総合文化センター

地域文化財展「みけつ国発見 - 豊穡の国・淡路」(仮題)

期 日：1月21日(土)～3月21日(火・祝)

会 場：洲本市立淡路文化史料館

シンポジウム「みけつ国の考古学」(仮題)

期 日：3月5日(日) 会 場：洲本市総合文化体育館

お問い合わせ先

兵庫県教育委員会 考古博物館開設準備室 TEL078-341-7711(代) 内線：5897
 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 TEL078-531-7011 FAX078-531-7014



県立考古博物館(仮称)先行展

自然とともに生きる

—— 人と環境の考古学 ——









期 間 平成**17**年7月**16**日(土)～9月4日(日)

時 間 午前**10**時～午後**6**時

休 館 日 毎週月曜日(但し7/18を除く)・7/19、7/24、8/28

場 所 播磨町郷土資料館 **入場無料**
Tel.0794-35-5000



●土 催／兵庫県教育委員会・播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館
●問い合わせ先／兵庫県教育委員会文化財調査事務所 Tel.0794-531-7011

編
集
後
記
 今回は江戸時代後期の陶磁器を扱いました。江戸時代のものを扱うと「物好き」が集まった当事務所でも「なんて物好きな」という視線を感じます。ただ、今回紹介した焼物は現在では廃業しているものが多く、地域の歴史を伝える上では新しい時代のものといってもおろそかにはできないと感じています。最後になりましたが、貴重な写真を提供していただいた姫路市教育委員会、三田市教育委員会にお礼を申し上げます。(BM)